

卷 頭 言

加 藤 武

教父にいか接近するか。かえりみれば、ドグマティックなアプローチか、あるいは文献学的なアプローチか、この後者の選択から教父研究が始まっている。ピエル・クルセルは主観の干渉を排してテキストの比較を強力に進めた。アンドレ・マンドウーズはこれにたいしてテキストの条件、コンテキストの考察を重んじる。十七世紀から二十世紀を終えようとする今日、依然として研究の主流を占める。若き日に筆者はクルセルの『アウグスティヌス研究』に接し、圧倒された。はたして日本においてこのような方法を進めるべきか、あやぶむ思いを、中世哲学会の休憩のひととき、松本正夫先生におそるおそるうちあけると、「おやんなさい」。答えは明確であり、大きな励ましとなった。日本は十七世紀以来、朱子学からの解放をなしとげたすぐれた文献学の伝統をもつ。その特色として、吉川幸次郎によれば言語活動の把握がある。あるいはこの方向に日本のこれからの教父学研究の世界へのたしかな寄与があるのであるのではないか。

このごろうかぶ思いは、教父と語ることが出来たら、ということであって、教父を研究したい、ということではない。教父と語ることによって、ヴェリタスが開かれてくる空間を共有したい、という希求の念がしきりである。

たしかな登攀の途をわれわれは探り求める。しかし、途は深い霧に閉ざされている。作曲家ルイジ・ノーノがスペインの古寺院の壁にみつけたという碑銘をかかげよう。 *no hay caminos...*